編集後記

本年度も 3 年生の演習にて行った研究成果の報告をまとめることができた。関係各位に心よりお礼申し上げたい。

今年度のグループ研究は，いずれもおおよそ実験前に期待した通りの結果が得られたと言っていいだろう。たまたま運がよかったのか，それとも目のつけどころがよかったのか。いずれにしても，特に目を見張るような理論的見解が創出されたというわけではない。むしろ，直感的にありえそうな予測に結びつく，それなりに順当な仮説が設定されたからそのような結果になったと言うほうが事実に近いだろう。

こんなふうになりそうだといった直感に基づいて仮説を構成することは，予測から仮説を組み立てることになり，物事の順序としては逆転しているように思える。しかし，実際のところは，ここでいう予測は報告において予測として記述できるようなものではなく，漠然とした予感に近い。一方，報告において正面から“予測”として提示できるのは，その研究において設定した実験の状況において何ごとが起こるのかを明確に述べたものである。つまりは，実験において操作する独立変数と測定する従属変数の関係を明確に記述するものでなければならない。予感にはそこまでの具体性はない。そうすると，最初の予感から仮説に至るまでの間には，思いついた関係性をいったん抽象化して一般的な記述を構成し，そのあとで実際に実施可能な実験の状況を設定し，最終的に，設定した実験状況の中で起こるであろう事柄を述べたものが本当の予測になる。

実験条件から仮説を思いつくということは転倒した実践に思えるが，具体と抽象を何度も行き来することによって十分に仮説が練られ，そのうえで実験を組み立て予測を導くのであれば，ある意味で理想的なことの運びと言えるのかもしれない。もちろん，何度も行き来するというところに苦労はあるのだが。

2026 年 3 月 19 日

大正大学人間学部人間科学科
井関 龍太
r_iseki@mail.tais.ac.jp